

一人ひとりの命が尊重される社会に

河野太通さん (下)

こうの たいこう / 1930年、大分県にうまれる。龍門寺住職。臨済宗妙心寺派の管長、全日本仏教会会長、花園大学学長を歴任。著書に『禅力—あなたを変える禅の名言』(海電社)、『覚悟の決め方—僧侶が伝える15の智慧』(共著・扶桑社)など多数。

から。障害は欠けているのではない。そのような視点で障害、そして障害者をみていかななくてはいけないと思います。臨済録の一文を私はそのようにとらえました。

●平和＝真理に謙虚であること

社会が戦争に転がっていくような状況になってきますと、障害のある人は「欠けている存在」として、お荷物にする。そういう雰囲気から障害者を人間扱いしないようなことになっていく。社会が人間の存在価値を比較するものさしを当たり前のもので抱くようになっていく。それは、どんな命でもかけがえないものであるということを否定することになります。そういった意味で戦争はもちろん、戦争への動向は避けなくてはなりません。

しかし、口で「平和」を求めればよいということだけではありません。それだけではなく、一人ひとりが世の中の道理に謙虚であらねばならないと思っています。

世の中の根本的真理の一つは、「すべてのは移ろいゆく。同じ状態であるものはなく、常に変わっていく。」ということ。執着するところを戒める教えにつながります。経済的な欲望、欲求の追求だけでは、安らぎというものは得られません。平和に暮らそうと思つたら、すべては常なきものであることを覚悟しておくことです。これを「諸行無

●仏教の教えと障害者

仏教の世界でも、障害のとらえ方について考えることがあります。經典の中には差別的に疑わしく思えることが出てきます。臨済録に、「眼に在っては見るとい、耳に在っては聞くとい、鼻に在っては香を嗅ぎ、口にあつては談論し、手に在っては執捉し、足に在っては運奔

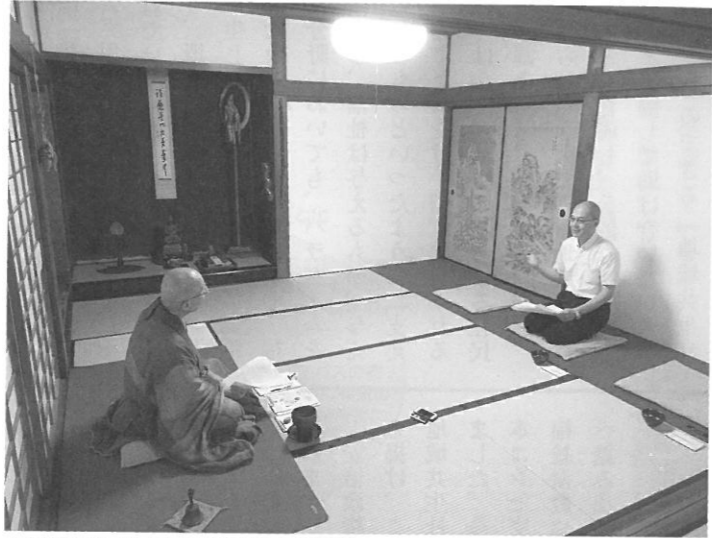
す、何をか欠少す。」という文章があります。では、眼が見えなかったり歩けなかったりすると、欠けている存在となってしまうのでしょうか。ある小学校に、眼のほとんど見えない男の子が入学してきました。「健全」の児童たちが、「劣等者」扱いしているのを知った担任の先生が、全員を階段の上へ上げ、目隠しをさせ、一人ずつ階段を降りさせまし

た。四つん這いになる子、泣き出す子もいました。最後に、眼の見えない子は姿勢を正して、静かに、堂々と階段を降りてきました。それを見たまみなは、「〇〇ちゃんはずい」と尊敬の念を抱いたということです。人のこころのはたらきということ。は、障害のある人たちこそゆたかにおもちゃがないかと思つた。かわる側のこころも養われるわけだ

常」と言っています。これはどの国に行っても、いつの時代でも、どの宗教でも、この世の中の真理です。その真理に対して謙虚であることが大切です。また、「一人では決して生きていけないものではない」ということ。「人様との縁を大切に」ということです。人様の手助け、国と国との手助け、いろんなつながりがなければ生きていきません。今この瞬間もそういうかわりあいがあるって私たちは生存していられます。これを「諸法無我」と言っています。

戦争になりかけて、平和を訴えるのも大切ですが、いざという時になって慌てるのではなく、それまでにいのちを大切にすると習慣をもつ、世の中の真理に謙虚である、そういう心を常日頃から抱いているということが大事だと思います。だから教育の役割はとても大きいものがあります。

私の小学校から中学にかけての学校生活は、軍国主義教育でした。私は立派な軍国少年になっていました。戦後、それが誤りであったことを知る。教育がいかに大事かということを思います。世界にはいろんな主義・主張があります。しかし、子どもたちに対する教育は、どんなに時代が変わっても、人間として正しい生き方、あり方、人生の過ごし方を教える場でないといかんと思つた。それが抜けて、将来経済優先の社会で生きていけるように技術を習



▲河野太通さんに土岐邦彦さんが聞く



▲臨済宗妙心寺派教団の掲げるスローガン



取材メモ

得させることは極端なことを言うこと、上手なところをこしらえるようなことになりかねません。常日頃からこの世界の真理に謙虚であり、暴力を行使しない、戦争に反対するだけではなく、真理を高らかに唱え、他国にもそれを主張し、それに反する行動あればそれを諫めていく。憲法九条をもつ日本は、積極的に発言する。そういう時代になってきたのだと思います。

聞き手の私にとって河野太通老師は雲の上のような存在です。老師が住まわれるお寺に向かう道中はまさに緊張一色でした。それでも、私たちを包み込むようなそのお人柄に緊張の糸はほぐれ、老師が語られる言葉の一つひとつが身体に沁み込んでいきました。現実の社会がどうなっているかを深く洞察することなくして、真の平和、そして人々のこころの安寧を語ることはできないと説かれる老師。現代に生きる宗教者の矜持を見せていただきました。帰りがけに「老師、握手をお願いします」と申し出た私の手を包んでくださった掌の大きさと柔らかさは格別でした。(聞き手 土岐邦彦・岐阜支部長)